

ろ、もう日本海にも米軍の潜水艦が出没し、空からも爆撃され、あるいは機雷が投下されていて、沈没する船が多くなりました。しかし、救命具も不足しているので前後に五本ずつの竹筒を組み、胴にくくりつけての航海でした。その間米潜水艦に追われ蛇行しながらでした。

当然、撃沈された味方の船もあります。さまよううちに「陸が見えた、陸が見えた」と叫ぶ、たぶん千島列島だろうと思った。ところが幸いにもそこは新潟港でした。こうして私は救われたのです。生きて帰った故郷日本に戻りえた自分は幸せでありました。そして、その後、茨城県の鹿島灘の浜、千葉の九十九里まで汽車で行き、そこに泊まりながら、対米上陸軍防衛の陣地構築に専念してきました。そして終戦です。

今は飽食時代と言ってもいいが、戦争体験者として次代に残すべきことは、生きることの楽しみ、自由であることの嬉しさ、自分自身を築いていることの幸せ、さらに人との触れ合い……平和そのものを願う気持ちではないでしょうか。

## 関東軍ノモンハン事件 阿爾山照空隊

岩手県 谷川源 一

軍隊に入ってから履歴は「軍隊手牒」に記入され、それが公的な資料とし、兵隊個人にも渡され、更に同様な軍歴がそれぞれの所轄の連隊区司令部の兵籍簿として保管されています。私は昭和十四年三月四日、現役兵として高射砲第十連隊第三中隊に入営する以前の昭和十四年一月十四日より、主として軍隊に関する記録と、公的な事項や心情などを六冊の手帳に日記として綴っておきました。

私は大正七年一月二十九日、岩手県上閉伊郡遠野町（現遠野市）拾参地割、四拾参番地で生まれました。

昭和十二年徴集の徴兵検査を受け甲種合格でした。當時甲種といえれば心身共に健全と太鼓判を押された男子

として、一つの名譽でもあったと地方では言われていました。特に昭和六年の満州事変、十二年の支那事変勃発の年は戦時に突入した時期でありました。国際情勢と国民感情の昂揚との間に挟まれ、経済的には比較的乏しかった我々東北地方の壮丁の多くの心境は複雑でした。

昭和初期の経済恐慌と、いわゆる東北の大冷害との影響は依然として岩手県の農村には残っていました。

働き手の青年が、国民の義務であるとはいいいながら、仕方ないと諦めなければならぬことながら、事実は一家の生計の柱となっている壮丁も多くありました。

老祖父母や病弱な父母、幼い弟妹を残しながら、後ろ髪引かれる思いをして入営した小作農の方もいました。

そういう戦友にとっては、軍隊生活の厳しさなどは耐えられる、それより残された家の生計や病状とは心を傷めることの方が大きな苦しみでもありました。ですから、軍隊の労苦とは軍隊に入らなければならぬという思い、軍隊に入った瞬間からあったことで、軍隊を知らない現在の人々には理解できないかもしれま

せんが。

幸いに私は体格にも恵まれ、家庭も一応後顧の憂いなく入営したのですから幸せでした。私の入隊は中部第七十二部隊という通称号で場所は静岡県浜松でした。満三年二カ月間の軍歴については軍隊手牒に概要は次のごとく記されています。

昭和十四年三月四日現役兵トシテ高射砲第十連隊

第三中隊ニ入営 ○同年七月十六日関作命第六七号

ニ依リ応急派兵下令 ○同年七月十七日関東軍第一

野戦照空隊ニ編入 ○同日牡丹江ニ向ヒ公主嶺出発

○同月十九日牡丹江ニ到着牡丹江要地防空 ○八

月四日牡丹作命第八号ニ依リ同月五日阿爾山ニ向ヒ

牡丹江出発 ○同月七日阿爾山到着阿爾山要地防空

○同年九月二十四日山命第三十五号ニ依リ同月二

十五日公主嶺ニ向ヒ阿爾山出発 ○同月二十七日公

主嶺到着 ○同月三十日復員完結（ノモンハン事件

完結の意味） ○同年十月二十日牡丹江へ移駐ノタ

メ公主嶺出発 ○同月二十三日牡丹江到着 ○同日

ヨリ同地駐留警備 昭和十五年二月二十四日瓦斯兵ヲ命ス ○同年三月一日砲兵上等兵（高射砲の兵科は砲兵科である） ○昭和十四年八月七日ヨリ同年九月二十五日迄「ノモンハン」事件ニ参加 ○昭和十六年五月一日陸軍兵長 ○同年五月二十日下士官勤務ヲ命ズ ○昭和十六年七月十日高砲一〇作命甲第五号ニ依り牡丹江要地防空ニ従事 ○七月二十九日動員編制ニヨリ照空第一中隊ニ編入 ○昭和十六年八月二日動員完結 ○昭和十七年四月十三日任陸軍伍長 ○昭和十七年四月二十三日中部七十二部隊ニ転属 ○四月二十七日釜山出帆 ○同月二十九日字品上陸 ○同月三十日中部第七十二部隊到着第五中隊配属 ○五月三日現役満期除隊 ○五月四日予備役編入

入営し、まず覚えなければならぬのは上官、特に直屬上官の名前であります。即ち連隊長、中隊長であり、更に大切なのが連隊長の方針であります。一般歩兵ですと師団長、兵団長でありますが、高射砲ですの

で当時は関東軍になりましたので、関東軍司令官が直屬上官のトップでした。当時は植田謙吉大將です。連隊長は山岡重光中佐、中隊長は内海精一中尉で、班長は新堂邦夫軍曹であります。入営してから現在には五十七年間、細かいことが思い出されるのはこの六冊の手帳があつたからでしょう。

連隊長の方針は、「忠一君に対し二心なきこと」「一節一節制が正しく其の操を守る」「吾々軍人は名が命である」「軍人勅諭を覚えることは、軍務に精励することである」具体的には「一、軍人精神ノ鍛錬 二、団結の鞏固 三、必中ノ信念（砲兵は特に） 四、実戦的訓練 五、馬匹車輛ノ愛護 六、正シク強ク朗ラカニ」であつたと記憶します。

高射砲隊に入るとは思つていなかったのですが、一般歩兵とは全然違つた教育で思わざる苦勞でした。私は軍隊に関しては、学校で軍事教練も受け、真面目に勉強をしていて一応の知識を持っていたつもりでした。また体力もありましたし、柔道は有段者でもありまし

た。そのようなことから大概の訓練には耐え得ると秘  
そかに思っておりましてので、相当の厳しさはあつて  
も頑張っていました。

高射砲隊、特に私は照空灯、聴音機等の防空関係機  
器の操作、電気関係、機械の構造など、小銃や機関銃  
を扱う兵種と違つた機械工学、数学、光学、聴音など  
私にとつては今まで縁のない、経験のない勉強と演習  
の連続でした。

そのような教育状況の中で私の心を最も悩ました精  
神的苦勞とは、幹部候補生受験を強く推されたことで  
した。「上官の命令は天皇の命令である」と軍人勅諭  
で教わっています。軍隊という特殊な環境の中で、班  
長・教官・人事係・中隊長からの言葉です。

人事係は母であり、中隊長は父であり、班長は兄で  
あるというのが軍人の家庭という兵営での生活であり  
ます。しかし、私は長男であり家を継ぐという責務が  
あります。父も母もそのことを切に望んでいましたし、  
これが日本の特に農村や旧家の無言の掟でありました。  
まさに「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲

すれば忠ならず」のジレンマの中の初年兵生活は肉  
体的な苦勞より何ほど苦しかったことでしょうか。この  
苦しみは今の人には理解できないことです。

しかし、私の時代は昭和十四年、支那事変のころで  
すが、大戦末期の歩兵等の一般兵科の幹部候補生が航  
空科に転科し、更に操縦見習士官として特別攻撃隊へ  
志願をと要望されたことを思えば、私といえども幹部  
志願を断われなかつたと思ひますが、家庭の事情を理  
由に幹部志願をしませんでした。

そのため一期の教育が終了して間もなく、ノモンハ  
ン事件勃発により応急派兵、翌日、関東軍第一野戦照  
空隊に編入となり、満州の牡丹江に向かつて駐地公主  
嶺を出発しました。正式には昭和十四年八月七日より  
「ノモンハン事件」参戦ということになります。

本格的な対空戦闘は恐らくノモンハン事変であつた  
と思ひます。七月十七日の早晩午前四時、非常呼集が  
あり、軍装を整えて待機して機械、器具を準備して貨  
車に積み込む。翌十八日には一日中貨車の中で過ぐす。  
十九日牡丹江の小学校講堂を宿舎とする。二十日出発

し一路陣地に向かい進入。その晩、私は衛兵勤務いよいよ第一線での警戒勤務で緊張する。何しろ、初めての対ソ戦です。

二十一日は相変わらず暗れではあつても露営地に蚊の多いのには閉口です。敵機の来襲なし。第三軍参謀の巡察もあるためか、掩体壕を掘り、敵機の来襲、銃爆撃に備えていました。

その間、次のような守則により警戒をする。

#### 第一動哨

- 一、指示せられたる経路を見回り器材を監視す。
- 二、特に上空に対し深く注意す。
- 三、爆音（機影）其他異状を認めたる時に直ちに照空隊長並びに衛兵所に急報す。

#### 第二動哨

- 一、指示せられたる経路を見回り警戒し併せ上空に注意す。

二、昼間使用せし火気盗難に注意す。

三、異状を認めたる時は照空隊長並に衛兵所に急報す。

その間、私は体調を崩しての勤務をしていましたが八月三日ごろ、ようやく健康回復し再び使役をしながらではあつたが戦況は逐次変化してきたようでありました。四日十七時三十分急に命令が下り陣地を撤去、夜間の中に器材を全部まとめて貨車に積み込みました。

八月五日朝出発、終日車中にて過ごし、六日ハルビン通過、終日車中で過ごし。七日午前七時十五分、ハロンアルシャン到着、機材を下ろして陣地侵入、いよいよ戦闘の渦中に入る。早くも敵機の爆音を聞き、急遽、夜中照空灯の発電車を山上に引き上げる。八日、更に射光機（照空機）を山に引き上げ、一時整置し、夜中空襲に対するため掩体壕を掘りました。

九日予期したごとく敵機来襲する。昼夜を通して掩体と防空壕を掘りました。

翌十日、本格的空襲、午後数十機の敵機が来襲する。初めて直接敵影を見ました。我々照空機は高い所に設置してあるので、敵機の銃爆撃を受ければ被害は大きくなる危険は大きい。高射砲隊も対空射撃を盛んにし

七機を撃墜しました。敵機戦闘は低空で地上掃射をする。支那大陸では我が軍が優勢であったが、ノモンハン戦は有力なソ連空軍であるから、支那事変の比ではなかったと思います。しかし、我が軍の損害は少なく敵機を撃退することができました。夜間は続いて防空壕掘りでした。

翌十一日、午前、午後にも三機敵機来襲。我が陣地は無事であったが味方の高射砲は当らず。彼我共に損害なく、夜間防空壕を掘る。我々照空隊は敵機を射撃することもできず無防備であるから、空襲されたら手も足も出ない、敵機のなすがままであります。唯一の頼みは防空壕、掩体であります。

十二日、午前中、今度は敵の超重爆機T・Bが来襲被害なし。十三日、曇後雨のためか敵影を見ない。日曜でもあり雨のためか?と陣地で話し合っていました。十四日、雨止まず何もかも陣地はジメジメ、嫌な気持ちだが敵影を見ない。十五日、十六日、敵機来襲なく、午前中对空監視をしていました。十八日、午後一時、久しぶりに敵機姿を見せる。TB型超重爆機の航速の

大なものには驚く。敵はだんだんと戦術を変えて来るのか何んとなく不安でありました。

十九日、ハンタガヤまで敵機三十機来襲の報があったが、我が陣地ではかすかに爆音を聞くのみで敵影は発見されませんでした。やはり本格的空戦が始まるのか。

いよいよ敵の大攻撃が始まったのは翌日の二十日からでした。午後一時ころ、数十機の敵戦闘機が来襲して来ました。やはり思ったとおり先日 of 戦法とは変化しています。戦闘機は我が高射砲陣地に地上掃射を浴びせませんが、高射砲隊はびくともせず射撃でお返しをし、見事に八機を撃墜しました。今度は敵の爆撃機が十七機編隊で我が陣地の頭上を通過し爆弾を投下しましたが、我が軍に損害はありませんでした。照空隊陣地は昼は掩体の中故発見されず、敵空襲の状況を監視しています。夕刻より更に掩体・防空壕を掘ります。

これが敵の攻撃を避ける唯一の手段ですから。二十一日、九時ころ、敵二機の編隊来る、偵察のためか。十一時ころ、三機編隊敵来襲し爆弾投下。十九

時ころ、更に九機編隊にて来襲、アルシャン付近に数個の爆弾を投下してきたが、いずれも損害なしです。しかし、投下技術が巧みになってきたことに驚く。本日の来襲機はいずれも爆撃機で高度は六千メートル以上の高空からでした。

二十二日、朝七時ころ、二機編隊敵爆撃機来るも東方から西方へ飛び去り、そのため異常なし、高度六千メートル。昨日同様対空監視をし、夜間は防空壕掘り翌日、敵影なし。二十四日、十六時半、二十機編隊の爆撃機来襲、数個の爆弾を投下して悠々と飛び去って行ったが、我が軍の被害は甚大であったといえます。しかも、高度六千メートルから謀略用？ピラを投下。夕方十九時ころ、四機編隊の敵機来襲し、高度七千より爆弾投下、更には急降下爆撃まで受け、あなどれぬ状況であるので、夜間防空壕掘り（昼間では陣地の存在を知られ襲撃を受けるから）。

二十五日、敵影を見ず。夜間防空壕掘りを続ける。

二十六日、晴後風強く小雨、そのためか、午後四時ころ敵爆撃機一機見るだけで他に異常なし。二十七日、

雨後晴、雷雨、爆音聞くという報せがあったが敵影見ず。友軍機九機飛来の情報は聞きました。二十八日、爆音聞くも機影見ず。二十九日、午前九機、午後十機編隊の友軍機を見るも、夜間は防空壕の屋根を作る（前前日の雷雨などのため）。三十日、本日はずっと友軍機のみ飛ぶ。三十一日、昨日同様友軍機のみ、午前、機械・機器運搬、夜防空壕・屋根作りを続ける。

九月一日、三十二機編隊友軍機飛ぶ。九月二日、我が陣地上に十一機編隊の友軍機往復した。午後二時ころ、ハンダガヤ上空において数機の爆撃機・戦闘機、我が陣地を攻撃するのを見る。友軍機一機が応援を求めに返る。応援機飛来の頃は既に敵影はありませんでした。夜間防空壕屋根概ね完了しました。

三日、五時、聴測を主とする訓練約一時間、十時より友軍機を見る。四日朝、八機編隊友軍機ハンダガヤ上空に向かい飛来、続いて敵戦闘機九機しばらくぶりに姿を見せるも被害は無かったようです。その後数回、友軍機我が陣地上空を飛ぶ。昼、友軍機一機故障のため阿爾山司令部付近に不時着し、機体が大破したのを

見ました。

五日、友軍機と敵機の教編隊を見るが戦闘機はなく、何か状況が変わった状況が感じ取られていました。午後八時四十分より十時まで、照空燃射光訓練を実施（訓練戦闘期でも実施）。六日、午前五時より一時間演習実施。本日は友軍機のみ飛行する。七日、本日は気不良のため爆音らしいものが聞こえたのみで他は異常なし。八日、友軍機の爆音のみ聞く。九日、午前中、友軍機三機編隊を三度ばかり見る。

なお同日、父上より二通の手紙を受け、中にお守りが入れてありました。何か小包を送られたとの報はありましたが、手紙の中に「幹部候補生の件いかがになった」の文がありました。胸に五寸釘を打ち込まれた感じ、残念でなりませんでした。先ほど申したとおり、私は家のことを思い幹候受験を断念しました。上官に勧められたことを断わったことで、男として、軍人として残念な気持ちは残っていました。翌日の午前中、昨晚に続いて陣地で父上に手紙を書いたが途中で筆を

止め、幹候のことを考えると何か気が引けてなりませんでした。その日は我が心の中のごとく猛烈な吹雪となりました。

十四日、晴れたと思うと降り、降るとまた晴れるという呆れた天気。午前中晴れ間に敵影を見る。しかし何もせず飛び去る。九月一日に上等兵進級の旨を上官より聞く。十五日、終日天気良く、午前・午後を通じて敵機の友軍機飛来。

十八日、夕刻より雷鳴凄し。「一天俄かにかき曇り霜が降り出し、金色の鴉が飛来し、神武天皇の弓の先に止まる」との小学校の教科書にあるごとき、この戦闘勝利疑いなし。神は正義に味方する。まさに、翌十九日、日ソ停戦条約締結の報を聞きました。

二十三日になると、近いうちに勤務地の転換があるという噂が飛びました。「公主嶺へ帰る」「ノモンハンへ行く」「ハンダガヤに行く」「ハイラルへ行く」「牡丹江へ帰る」などの情報です。教育演習がないので直ぐ陣地へ帰り、装具を纏める。軍装検査・機材整備といつ撤去命令が出ても出発できるよう用意をしました。



しかし、今まで戦闘参加し敵航空状況の監視、防空壕、掩体などの陣地構築等の働きが無駄になつてしまつたことが残念でした。また、ノモンハン事件での戦死者・負傷者の功は酬いられない。と同時に本日父上から手紙に同封した伊勢神宮両社のお守りを戴いたのは、子を思う親の心の有り難さをつくづく感じた次第でした。お陰で、数多い空襲の間、負傷せずに勤務を終えた感謝にも続いているものです。

二十四日、早朝起床、機材点検、阿爾山防衛の最後の監視哨に立つ。照射班の任務は本日で終了。晩は初めて穴蔵の中で寝たが、非常に寒かつた。二十五日、帰營装備、阿爾山駅ホーム集結。十九時二十分、同駅発「誠に残念であり、また思い出深い生活であり、かつ戦友同志一致して、ソ連航空機と戦つた愉快な面をもつた一日、一日でありました」。ノモンハン事件の戦闘は厳しかったが、我が部隊將兵の意気は軒昂でした。

今まで申したことは、兵隊としての三カ年余の間、つけた日誌、日歴を参考とした私の戦歴でした。細か

い記録は大切な資料として大切に保管するつもりです。今発表されている個人の記録の多くは、どちらかというところ露悪になつたり、興味本意のものでありがちであります。当時私は真面目に、一兵として書き続けたものであります。

## 満州での国境警備

### 終戦は台湾で憲兵隊

栃木県 手塚 敏雄

今の矢板市、大正十年六月十八日当時の泉村で農家の五人の兄弟姉妹の長男として生まれました。

昭和十六年徴集兵で甲種合格、昭和十七年一月、現役兵として、兵庫県の篠山連隊に入営しました。泉村から三人一緒でしたが、歩兵連隊で三カ月間の教育で特業は軽機関銃です。篠山の演習場は後に行った満州と比べれば箱庭みたいなものでした。関西の人とは言葉が違う「関東のボンクライ」などと言われたり、内